





從
桑名
公
平
友

文
政
元
年

三
綱
公
年
譜
略

此子即
ノ如シ、
次掛川
其齡幾何
家康公欣然トシテ、
謹ミテ十一歳ト奉答

往キテ、大納言(秀忠公)ニ云フ(殿ニ奉仕セシムベシ、自分ヨリモ江戸殿(亦秀忠公ヲ云フ)ニ
詞ヲ添フベシ、ト父(家康)ニ懇切ノ上意アリ、定勝父子共ニ謹ミテ、拜承感謝シテ退ク。
然ルニ定勝夫妻以爲ラカ、遠江ハ暖國ナルニ江ノ寒地也、
ヲ冒シテ旅行セムヨリハ、
ラレタリト雖ドモ、三郎殿
氣ヲ畏レテ徒ラニ遷延スベ
ニ下リ、而カモ先日掛川城中
居ル所ノ老臣本也、
ニ如カザ

遣ハサ
迎、三郎四郎ヲ御本丸ニ差遣
ノ紹介ヲ以テ、三郎四郎ニ接見シ玉ヘ

任ラザルカ故ニ、今之ヲ守リ、管テトシテ、其御
手ク御取立テ有之ニ於テハ御奉意タルベシ……
ニ之ヲ奉諾セラレ、大久保相摸守忠鄰朝臣

同八年癸卯

定綱公年甫メテ十二。

此年家康公

兼ヲ江戸城ニ置ク。

信ニ命ジテ曰ク……

覺悟ニ在ルベキ也

五千石ノ封土ヲ新

孰效スベキノ覺悟ヲ確

正信此旨ヲ承ケテ、多思慮ヲ
タニ定綱ニ賜ハレリ、是寔ニ位
是ヨリ以後、公忠義報效ノ由
定シテ、平素軍旅ノ道修養

此年慶長八年癸卯家康公命シテ、井伊直政ノ遺腹ノ子直孝ヲ特ニ
又九男頼宣ヲ水戸ニ封ス、時ニ年僅カニ二歳。

同九年甲辰

此年幕府大ニ天下ニ令ジテ、各線ノ國道里程ヲ改定シ、每三十六丁ヲ以テ一里ト定メ、每里ニ一里塚ヲ築造シテ、之ニ植ルニ楸樹ヲ以テセシム。
江戸大納言秀忠ノ夫人淺井氏、男子ヲ生ム、家ニ自巳ノ幼名トシテ、正徳ノ代ト呼ビ、成長ノ後改メテ家光ト曰フ。

此歲藤堂高虎主唱シテ、天下如

陸五萬石

同十年乙巳

定綱公年甫メテ十四。

大將軍家康上奏シテ其職ヲ辭ス。

詔シテ其嫡子秀忠ヲ以テ、征夷大將軍ニ任ジ、正二位ニ陞叙シ、大内臣ヲ兼テシム。是ヨリ以後世人家康ヲ稱シテ前將軍ト曰ヒ、若クハ之ヲ家康ト曰フ。

大御所家康ハ江戸城ヲ新將軍ニ譲リ、又大ニ列藩（津、福島、加藤、黒田、淺野、細川氏等ノ諸侯）ニ課シテ、江戸城ヲ改築セシメ、藤堂高虎ヲシテ工事ヲ總監セシム。

是ヨリ家康平生ハ多ク駿府ニ居リ、隨時極メテ輕装ヲ以テ江戸ニ往來スルヲ常トス。

此歳前將軍家康其偏諱一字ヲ島津忠恒ニ賜ヒ、併セテ松平氏ヲ授與シ松平家久ト改稱セシム。

秀忠父ノ職ヲ承ケ征夷大將軍ニ任ゼラレ江戸ニ居ル、軍國ノ大事ハ仍ホ家康ノ決裁ヲ仰グ。

是ヨリ先キ家康ハ特ニ藤堂高虎ニ命ジテ、江戸城新築ノ繩張大計ヲ
テ之ヲ改築シ、秀

忠ヲシテ之ニ居ラシメ、本多正信ヲシテ新將軍ノ號

此年三月、秀忠公御上洛ニ付定

同年四月十六日秀忠公將軍宣下

月二日御書院番頭ニ任ゼラレ

是ヨリ先キ、家康公尙ホ江戸城

兩人共ニ對局棋ヲ圍ム、淺野長政其傍ニ在リ之ヲ觀ル、時ニ公
内大廣間ニ於房ヲ水戸_ニ逢政宗、筑前侯黑田長政

ツ出座アリ、彼三老將ニ向テ言ハルルニハ……………此童子ハ殊
乃島_ニ少年也、各媒ニ致シテ善

キ者也ト……………

伊達ト黒田トハ碁局ニ熱心最中ナルガ爲ニ沈黙シテ答ヘモセザリシニ、淺野ハ直チニ畏リテ……………

某シ婿ニ仕ラム……………ト申サレケルニ由リ、公ハ更ニ定勝夫妻ニモ嬪ヲ御物語アリテ、淺野氏ト縁

組ノ約ヲ豫定セラレタルハ、定綱君十二三歳ノ頃ノ事也キ。

此ニ至リ乙巳年十一月、家康公ノ命ニ由リ、淺野家ト結婚ノ禮式ヲ舉行セララル。

按スルニ淺野長政ノ長男幸長ハ、慶長十八年癸丑八月病ヲ以テ紀伊ニ於テ歿シ、其二弟仲ヲ長晟

ト曰ヒ、季ヲ長重ト曰フ、長晟ハ長兄幸長ノ後嗣ト爲リ、紀伊_ニ石ヲ領シ、而カモ長政ハ

致仕セリト雖ドモ其多年國家ノ爲メニ殊ニ盡力功勳ノ多大ナル故アリテ、別ニ封土ヲ賜ハリ常陸

ニ於テ五萬石ヲ領シ、前將軍ト最親善ニシテ毎月數回江戸城_ニレテ共ニ碁ヲ圍_リソ常ト

セリ。

十六年庚戌長政老病ヲ以テ卒_ス 子_ハ特ニ命_シテ長政ノ遺領常

賜フ、此長重ハ_ハ弟タルノミ

ナラズ、而カモ其精神的

同十一年丙午

定綱公年十五。

此歳頼房_{家康公ノ}十一男 常陸ノ下妻ニ封ゼラレ五萬石ヲ食ム。

同十二年丁未

定綱公年十六。

松平定勝ヲ以テ伏見城ノ留守ト爲シ、井雄

ニ直孝年僅カニ十七。

同十四年巳酉

定綱公年十八。

此年、（？）...

勤功ノ臣ト同一

特遇ヲ賜シ。

諸侯ノ妻子大半江戸ニ至リ、各其邸内ニ住居ス。

頼宣（？）駿河ノ一部四十萬石ニ封シテ、濱松ニ治セシメ、順

ニ移封シ、三十萬石ヲ領セシム。

シム。

島津家久幕旨ヲ奉シテ琉球ヲ招撫ス、琉球頑固ニシテ之ヲ拒ム、

氏手兵ヲ發シテ之ヲ討チ、

五タビ戦ツテ其國都ニ入り、國王以下皆降服ス、僅カニ六旬ヲ留デズシテ琉球全ク平定ノ功ヲ奏ス、

幕府其功勞ヲ賞シ、琉球全島ヲ擧ゲテ之ヲ永世薩藩ノ附屬ト爲ス。

八月朔日下總國山川城並領地一萬石ヲ賜ハリ、執政本多正信其命ヲ傳フ、時ニ定綱公謹ミテ本多ニ對シテ曰ク……

御加恩ヲ賜ハリ、御城ヲモ預ケルベキ旨、上意允トニ忝キ所也、然レトモ山川城ハ古來城附一萬五千石ナルニ定綱ニ至リ五千石減削候ハム事ハ是長ク此城ノ瑕瑾ナルベシ、定綱ノ器量其封祿ニ副ハザルガ故也、ト人口有ラム事ヲ耻ヅ、故ニ定綱ニハ別ニ古來城附一萬石ノ場所ヲ下シ賜ハレカ...

ト申述べラレタリケレバ、正信之ヲ聽キテ、其ハ允トニ當然ナル事也、上ニテハ此五千石減削ナド有ルベキ思召ニハ、（？）ニ一倍ノ御加恩トシテ山川城預ケラルベキトノ御事也、自分モ此城附ノ事ニ、（？）タリ、序ヲ以テ言上スベシ……ト答ヘラル、公ハ不快ニ感ジテ退出シ、直チニ居邸ニ還リ、公ノ老臣兵藤八右衛門ハ、人ト、直ニシテ、公ノ是レモ責任スル所ナルヲ以テ、毎日公ノ出入スル毎ニ公自ラ兵藤ニ對シテ、言語ハ、ヘザルコトハ未、有ラザリキ、然ルニ此日此時ニ限リ公ハ城中ヨリ退出シ、一言ヲモ兵藤ニ、ハズシテ、（？）ラル、兵藤心中ニ密カニ之ヲ怪シミタリ。

其翌二日公又本多正信ト共ニ登城セラレタリシニ、新將軍秀忠公ハ正信ノ上甲ヲ嘉納シ、定綱ノ申

條當然ト思召サレ、乃チ山川ノ城附一萬五千石無相違下賜リス。

謹按 鎮國公年十八ニシテ、山川城主ニ任セラレ一萬五千石ヲ領ス。然ルニ公ハ未曾テ其封土領地ヲ以テ、領主一個人ノ私有トシテ視ルコトアラズ。土地人民ノ全ク是レ朝廷ヨリ之ヲ各武將ニ預ケテ以テ國家ノ公用ニ供セシムル者也。言ヲ換テ之ヲ言ヘバ、即チ撥亂反正ノ要具トシテ之ヲ公義公務ノ爲メニ使用スベキ者ナルガ故ニ、決シテ之領主ノ私意私用ニ供費スベキ者ニ非ズ。公當時年尙ホ少シト雖トモ、其天賦非常ノ英明忠勇ニ加フルニ其師友タル諸俊傑ノ感化ト競争トヲ以テス、其當初山川城主ノ時ヨリシテ、深ク自己心神ノ修養及文武ノ研究ニ注意シ、常ニ其研究ニ勉メ能ク士ヲ愛シ賢ヲ尙ビ、民ヲ愛ス。

同十五年庚戌

定綱年十九歲

井伊直孝年廿歲

酒井忠勝年廿四歲

同十八年癸丑

定綱公年廿二。

此年正月三十七藩ニ命シテ、皇宮ヲ修メシム。

池田輝政卒ス。長子利隆嗣グ。

八月淺野幸長卒ス。子無シ仲弟長晟嗣グ。

前將軍素ヨリ神ヲ敬シ、儀ヲ虔ミ、而カモ素ヨリ深ク意ヲ學術ニ留メ、賢ヲ尙ビ、能ヲ重ンジ、關原ノ勝後、遍ク經籍ノ未ダ刊行ヲ經ザル者ヲ探蒐シテ之ヲ出版セシメ、禮文ヲ修メ、道藝ヲ弘ムルコトヲ以テ志ト爲ス、故ニ將軍職ヲ讓リテヨリ以後、益々熱心聖賢ノ遺書ヲ購求シ、廷臣ノ典故ニ達スル者ヲ聘引シテ林信勝等ト共ニ連座講究シテ、日夕些シモ倦ムコト無シ。又弘ク文學ノ士ヲ招キ、縉素ニ拘ハラズ皆之ヲ禮重ス。

當時家康ノ志尙宏遠ナルコト如此。故ニ列侯中志慮深大ナル人々ハ、皆自ラ反省シテ以爲ラク、馬上ヲ以テ天下ヲ一時ニ取ルコトヲ得ベキモ、其天下ヲ真正平治スルガ爲メニハ、決シテ彼馬上的武

斷ヲ以テシ得ベキニ非ズト云フコト。即チ今ヤ日本帝國撥亂ノ大困難期ヲ越エテ更ニ其所謂反正治安ノ期ニ入ラムトスルノ時機タルコトヲ覺知セリ。

酒井忠勝ノ如キ、松平定綱ノ如キモ亦其人中ノ一人也トス。

然レ共、酒井忠勝ト云ヒ、松平定綱ト云ヒ、其學ブ所ノ大本領大圭義ハ、只是心ヲ正シ、躬行實踐以テ撥亂反正ノ一方面ニ活動スルニ在リ。能ク賢ヲ尙ミ士ヲ愛シ、以テ事有レバ則チ藩翰干城ノ任務ヲ盡スニ在リ。事收レバ則チ殖産興業以テ民ヲ安シ國ヲ平ラカニスルニ在リ。

其レ然リ、定綱ノ如キ當時封疆僅カニ一萬五千石ノ小領主ニシテ其職ハ將軍ノ親衛隊長タルニ過ギズ。年ハ僅カニ廿二歳ニ過ギズト雖モ、其天賦ノ沈毅重厚ト寛宏トニシテ而カモ能ク人ヲ知ルノ明特ニ絶倫ナルヲ以テシ、其平生常々自省自覺以テ修養ニ勉メテ些シモ倦怠スルコト無シ。其臣下タリ其部下タル者、皆定綱ノ仁智ト勇トニ深ク心服セザル者無シ。

故ニ一朝有事ノ日ニ當ラバ、定綱ノ活動ガ必ズ尋常ニ非ズシテ拔群奇特ノ事有ラムトスル前兆ハ、蓋シ當時活眼老功ノ識者ノ既ニ察知シタル所ナルベカリシ也。

果セル哉、此頃關東ナル江戸幕府及ヒ駿府ナル前將軍家康ガ、大坂ニ對スル有形的並ニ無形的關係事勢ノ切迫ヲ加ヘツ、アルニ至レル者、是レ實ニ慶長十八年癸丑歲末ノ形勢ニテアリキ。

同十九年中寅

公年廿三。

大阪戰役起ル。世ニ之ヲ冬陣ト云フ。

公其本職御書院番頭ヲ以テ其所部隊士(將軍家ノ士分所謂番士ヲ以テ編成セラレタル隊士)及家士兵藤八右衛門、小出善兵衛、三輪彌右衛門、大關五兵衛、菅谷左太夫等數十人ヲ率テ將軍ニ供奉シ出陣セリ。但シ此冬陣ニ於テハ其攻戰ニ與カリ專ハラ奮闘力戰シタル者ハ、多ク淺野長晟、井伊直孝、藤堂高虎(非但ト藤堂トハノ先鋒タリ)越前忠直、前田利常、池田利隆兄弟、蜂須賀至鎮、上杉景勝、佐竹義宣、石川忠總等ノ諸藩兵ニ在リテ、而カモ將軍麾下ノ諸隊ハ之ニ與カラザリシ也。

大阪冬陣、東軍集ル者約五十萬。而カモ城兵僅カニ十餘萬ニ過ギズ。然レ共、其城タル寔ニ海内無双天險ト人工トヲ究メタル者ニシテ、所謂難攻不落ノ實ヲ具セリ。

將軍ハ強攻以テ之ヲ陷レムト欲スルモ、前將軍ハ之ニ反シ彼徒ラニ多ク人ヲ損シテ以テ之ヲ急攻セムヨリハ、寧ロ策ヲ施シ之ヲ陷ルベキノ利タルヲ看被セリ。故ニ城中人心ヲ誘惑セシメ、亦之ヲシテ脅怖セシメ以テ和議ヲ連バシメ而カモ東西媾和ノ約茲ニ成ル。時ニ十二月廿日也。

元和元年乙卯

定綱公年廿四。

大阪城中諸將、初ヨリ本心媾和ノ實意アルニ非ズ。其實ハ家康ノ老衰ヲ待テ再舉スルノ自カラ西軍ニ利多キヲ慮リタル也。

大阪再舉ノ密謀頻々トシテ關東謀者ノ手ノ經テ、板倉勝重、松平定勝ノ詳知スル所ト爲ル。定勝ハ伏見城ノ留守トシテ、久シク京阪地方ノ警視ヲ總監セル者也、而カモ勝重ハ京都所司代トシテ京都ノ政治ニ殊ニ熟達セシ者也、關東謀者トハ即チ小幡勘兵衛景憲也。

既ニシテ大阪再舉ノ形迹彌露ハル。海内各州ノ不平ヲ抱ケル浪徒大阪ニ集ル者約十五萬トノ報聞至ル者陸續タリ。

將軍終ニ其征討令ヲ發シテ各藩ニ出征ヲ命ズ。先ヅ井伊直孝ヲシテ入京シテ東寺ニ陣セシメ、藤堂高虎ヲシテ淀ニ陣セシム。

四月十八日家康公先ヅ京ニ入り二條城ニ居ル。秀忠將軍ハ其廿一日ヲ以テ伏見ニ至ル。家康以爲ラク、此役ノ勝敗ハ當サニ野戰ニ決スベシ。乃チ藤堂高虎ヲ召シテ作戰方略ヲ問フ。高虎答ヘテ曰ク

『遠キニ利アリテ近キニ利アラズ、我輕兵ヲ以テ戰ヲ挑ミ彼レノ分レテ遠ク出ルヲ待チテ急ニ之ヲ擊タバ則彼ハ其方有ル限而カモ豫備無キヲ以テ敗叩ノ後ハ復守志無ケント』

家康公掌ヲ撫シテ曰ク、子ノ言允トニ當レリト。乃チ諸軍各方面其向フ所及ビ其守ル所ヲ定ム。

五月五日將軍ハ伏見ヲ發ス。定綱供奉ス。

是ヨリ先キ、東軍ノ先鋒井伊、藤堂及水野日向守勝成各方面ノ諸藩軍ヲ監督シテ、河内、和泉、大和、攝津、各地戰線ニ進入シ、激戰數回、東西各軍迭ヒニ勝敗アリト雖モ、西軍ノ雄傑將校多ク戰死シ、復挽回ノ望キ無キ者、五月六日ノ形勢トス。

七日ハ彌々兩軍終局決戰ノ日タリ。

前將軍自カラ全軍ヲ部署シ大別シテ左右兩軍トシ、以テ城ニ迫ラシム。

左軍 統帥ハ 家康公

先鋒ハ 越前少將忠直

本多忠朝、小笠原秀政並ニ淺野丹羽等ハ此先鋒ノ右ニ在リ、

本多正純、板倉重昌等各徳川旗下親衛兵ヲ率テ家康ノ後ヲ守衛シ、參議義直及頼宣

ハ又其後方ニ在リ。

左翼團 水野勝成ト松平忠明、本多忠政、伊達政宗、少將忠輝等ノ諸軍ハ左軍ノ左翼タリ。
右軍 統帥ハ 秀忠將軍

先鋒ハ 加賀利常

石川忠總、本多康俊等其有（次）、主井利勝、本多正信、酒井忠世、黒田長政、加藤嘉明又之ニ繼ギス。

中前衛

御書院番頭

第一 水野隼人正忠清

第二 青山伯耆守忠俊

第三 松平越中守定綱

御大番頭

第一 高木正成

第二 阿部正次

第三 内藤清次

此番頭六組ハ將軍ノ親衛隊ニシテ、各旗下士所謂三河武士若クハ駿遠甲信ノ武士久シク徳川家

ノ臣タル者ヲ以テ組立ラレタル者トス。

此六組ハ此時將軍統帥本部ノ前衛タリ。

井伊直孝、藤堂高虎、細川忠興ハ右軍ノ左翼タリ。

此五月七日大阪落城ノ殊功ト稱セラルル激戦ハ茶臼山方面ニ在リ、越前藩兵ガ敵ノ名將眞田幸村ヲ討取タル結果トシテ西軍大ニ亂レ越前忠直ガ大阪城京口門ヲ破リテ入り以テ徳川葵章ノ大旗ヲ城上ニ建テ以テ先登第一ノ勳ヲ奏シタルニ在リ。

水野勝成ハ忠直ニ繼ギテ城ヲ入ル。

此ニ至リ大阪已ニ陥リ、秀頼母子自殺シ、其將校火ヲ縱テテ殉死スル者數十人。

將軍其親衛隊將阿部正次(大番頭)高木正成(大番頭)水野忠清(書院番頭)青山忠俊(書院番頭)ヲシテ天王寺口、玉造口、青屋口、京橋口(皆大阪ノ城門也)ノ四門ヲ守ラシメ、又安藤重信ヲシテ西南四道ノ人夫ヲ率非テ城墟ヲ修理セシム。

前將軍將軍ト議シ、大ニ功ヲ論ジ、賞ヲ行ヒ、井伊藤堂ノ功殊ニ多大ナルヲ以テ、先ヅ大阪城中ノ

儲金黄金大銀千枚ニ直スル者各ニツヲ賜ヒ、且直孝高虎ニ各五萬石ヲ加封シ、後共ニ三十餘萬石ニ至ル。

水野勝成ハ備後福山十萬石ニ封ス。

少將忠直ハ從三位ニ陞リ參議ニ進ム。

前田、淺野、伊達皆官位ヲ進ム。

抑モ大阪夏役、御供奉ノ時ニ於ル定綱公ノ戦功並ニ其軍事上ノ特殊能力ガ、嶄然トシテ他ノ御番頭等ニ超越シタルヲ以テ當時將軍ノ確認スル所ト爲リタル事實ハ、載セテ別冊鎮國神公遺事四枚目ノ末行以下八枚目四行目ノ處マデニ明ラカナルガ故ニ宜シク之ヲ參照スベシ。

而カモ公終身ノ御本志事業トシ、又其治民ノ事迹トシテ特ニ重要ナルモノハ、宜シク更ラニ左記各條ヲ審看スヘシ。

元和元年乙卯

此年幕府、列藩諸侯ノ憲法及ビ訓戒十三條ヲ新タニ規定シテ之ヲ諸侯ニ頒示ス。定綱益ス深ク自ラ警省シ、以テ此憲法訓戒ヲ實行ス。

元和二年丙辰

前將軍正月廿一日有病、自カラ其不治ヲ知り醫藥ヲ斥ケテ用非ズ。

四月病篤シ婦女入侍ヲ禁ズ、十四日列藩主ヲ臥床前ニ召シテ之ニ切諭シテ曰ク……………

吾死シテ後、將軍或ハ政ヲ失ハバ則侯伯中ノ能ク其任ニ適スル者、宜シク斷然之ニ代リテ天下ノ

政柄ヲ執ルベシ、

天下者天下之天下ニシテ一人ノ天下ニ非ズ、吾何ゾ恨ミンヤ』ト。

乃チ其遺物刀劍、茶器等ヲ頒賜シ各國ニ就カシム。

家康又將軍ニ厚ク遺言シテ、將軍ノ任務ハ、寔ニ上朝廷ヲ崇敬シ、綱紀ヲ肅シ、國家ヲ愛護シ、人民ヲ愛撫スルコト。外ハ外國ニ對シテ寸刻モ油斷無ク軍備ヲ嚴ニシ、國威ヲ宣揚スベキコト。内ハ諸侯ヲ統率シ、萬民ヲ安セシムルコト。ニ在ルコトヲ明示セリ。

四月十七日家康薨去、壽七十五、初駿州久能山ニ葬リ大權現ト號ス。後更ニ日光山ニ改葬シ新廟ヲ

建ツ。(元和三年丁巳四月)

天皇特ニ號ヲ賜ヒ東照ト曰ヒ。將軍親ヲ參詣シテ之ヲ祭ル。

元和二年丙辰十月十五日

公年廿五。

此年封ヲ常陸ノ下妻ニ移サレ下野國河内郡ノ内及ビ常陸國下妻庄ニ於テ二萬五千石ノ加封ヲ賜ハリ、通計三萬石ヲ領ス。是ヨリ先キ、公藝藩ノ儒官堀正意ニ就キテ道ヲ學ビ、經史ノ講義ヲ聽キンガ此頃ニ至リ公堀正意ノ門人三宅正堅ヲ聘シテ以テ儒職ニ任シ初俸二百石ヲ與ヘ常ニ顧問ニ勤メシム。

同四年戊午十月五日

公年廿七。

此年又移封ノ命アリ。

遠州掛川城ヲ賜ヒ三萬石ヲ領ス。

公益ス心ヲ治民ノ事ニ用非、遠州新領地内佐夜郡中山ノ國道沿線ナル村々ノ距離疎隔ニシテ不便多ク、又行旅ノ危険不用心多キヲ認メ、乃チ人民ヲ獎勵保護シテ其人家三四戸ツツ沿線ニ連建セシメ、又城下ノ東西ニモ新町ヲ設立シ、以テ交通ト商業トニ便利ヲ増サシム。

元和八年壬戌

本多正純罪有リテ封土ヲ沒收シ山形ニ放タル。

元和九年癸亥

公年三十二。

將軍秀忠致仕ス。

家光入朝シ正二位ニ叙シ、内大臣ニ陞リ、征夷大將軍ニ任セララル。時ニ年二十。

家光上洛ノ途次掛川城ニ宿シ定綱ニ物ヲ賜ヒ、供奉ヲ命セラル。既ニ京ニ入ルヤ、幕府ノ議以爲ラク、京洛守護ノ要地トシテ、伏見ハ淀ニ如カズ。故ニ伏見在來ノ古城ヲ撤去シテ、別ニ新城ヲ淀ニ築クヲ必要トスト。乃淀城新築一切ノ總裁ヲ定綱ニ命セラル。

伏見城在來ノ天守閣、殿宅、諸矢倉、石木、一切舉テ之ヲ賜ハリ、移シテ以テ淀新城築造ノ用ニ供スベキヲ命ジ、又淀ノ城米ハ其必用ニ應シ定綱自由ニ之ヲ使用セシム。

是ヨリ先キ、定綱夙トニ先輩老功ノ將士ニ就キ兵法軍學ノ要旨ヲ研究シ築城ノ事モ亦深ク考究スル所アリ。故ニ今ヤ淀城新築ノ重大任務ヲ命ゼラルルヤ、苦心焦慮以テ衆智ヲ集メテ之ガ設計ヲ定メテ工事ヲ開始シ、豫定ノ計畫着々進捗シテ以テ其成功ヲ奏スルヲ得タリ。

是ニ於テ、又移封加領ノ命アリ。京都警衛ノ要地淀ヲ撰定シテ、此ニ新城ヲ築クト共ニ其城主ニ任セラレ領地トシテ山城、近江、兩國ニ於テ三萬五千石ヲ賜ハレリ。

元和十年甲子改元寛永ト爲ル

寛永元年甲子

公年三十三。

此年十一月前將軍秀忠西丸ニ隱居シ、家光之ニ代リテ江戸城本丸ニ移ル。酒井忠勝御老中ニ任ゼラレ政務ヲ司ドル。忠勝時ニ年三十八。此歳忠勝二萬石ヲ加封セラレ通計三萬石ト爲ル。

寛永三年丙寅

公年三十五。

酒井忠勝又加封二萬石ヲ賜ヒ通計五萬石ヲ賜フ。

前將軍秀忠、新將軍家光共ニ上洛シ、定綱亦供奉參

内ヲ命ゼラル。

天皇陛下親シク二條城ニ行幸セララル。

二條城警衛ノ爲ニ定綱ニ特ニ城外附近ノ地一萬坪ヲ賜ヒ、以テ其任務ノ用ニ供セシム。

初兩將軍ノ上洛スルヤ、前將軍先ツ江戸ヲ發シテ京ニ入り、親シク淀城ニ臨ミテ之ヲ巡視シ新築城郭ノ設計成績各處着々當ヲ得、宜キニ合シタルコトヲ認メ、殊ニ僅々短年月ニ於テ其造營ヲ完了シ

以テ京洛防護ノ要地ヲシテ堅固ナラシメタル段、深ク御意ニ満足セララル旨、親シク賞詞ヲ定綱ニ賜ハリタルノミナラズ、此度上洛中將軍家光ハ此淀城ヲ以テ其旅館ト爲スベキ旨ヲモ併セテ定綱ニ達セラレタリキ。

既ニシテ家光將軍京洛ニ到ルヤ、直チニ淀城ニ入りテ此ヲ旅館トセラレ、又其在城中屢定綱ヲ坐邊ニ近ク召見セラレ、種々軍國ノ事及ビ政治ノ事ニ就キテモ懇切談話アリ。

而カモ、京都附近行政要務中ノ最重要且ツ急ナル者ハ男山八幡宮ノ造營ニ在リ。此宮ハ恰カモ淀城接近ノ處ナルガ故ニ、特ニ定綱ヲ以テ其造營總裁ニ任ゼラル。

斯クテ將軍上洛ノ大業完了シテ、將ニ東ニ還ラントスルヤ、新將軍ハ特ニ定綱ニ命シテ曰ク、汝ハ宜シク予ヲ送り同行シテ江州水口迄來ルベシト、定綱感謝シテ之ニ隨行シテ水口ニ至ルヤ、家光將軍特ニ駿馬一頭ヲ賜ウテ別ヲ告ゲラル。

男山八幡宮造營ノ工事茲ニ始マラントスルヤ、定綱百方心カヲ盡シ、其頃海内屈指ノ良匠ヲ招キ、之ト共ニ能ク審按熟慮以テ其設計ヲ定メテ而後ニ着手シ、躬自其工場ニ巡視シテ以テ各部ノ工事ヲ

監督シ、其間又屢々八幡宮ノ社人等ノ、或ハ學識有ル者、或ハ文藝ニ達シタル人物ト共ニ個人的交際ヲ結ビ、以テ共ニ今古ノ史蹟或ハ地方ノ民情等ヲ訪問シ、以テ大ニ益ヲ受クル所多カリキ。

瀧本坊昭乗ト云ヘル八幡社坊ノ僧、其頃能筆世ニ聞ユ、其人物亦活達高雅ニシテ京洛名士社會ノ推重スル所ト爲レリ、公ハ此昭乗ニ就キテ筆道ヲ習フニ託シ、八幡ニ往來シテ京師附近ノ人物等ト廣ク交際シ、以テ筆札ノ外ニ大ニ自カラ修養スル所有リキ。

寛永四年丁卯

定綱公年三十六。

酒井忠勝年四十一。

此年忠勝ノ父忠利老病ヲ以テ其居城川越ニ於テ卒ス、其遺領三萬石ヲ忠勝ニ賜ハリ、通計八萬石ニ封セラレ川越城主ト爲ル。

寛永五年戊辰

二月家光公川越城ニ成ラセラレ滯留スルコト約二十日、其間或ハ花ヲ看、或ハ猪狩ヲ爲サル。

寛永六年己巳

閏二月家光公痘ヲ病ミ、一時危篤。人心汹汹タリ。此際酒井忠勝ノ盡力實ニ深大ニシテ幸ニ事無キヲ得タリ。其後月ヲ越テ全癒ス。

寛永九年壬申

正月秀忠公薨去。年五十四。終リニ臨ミテ秀忠公特ニ酒井忠勝ト土井利勝トノ兩人ヲ召シ、懇ニ託スルニ家光ヲ輔佐スベキ事ヲ以テス。

此年忠勝陞リテ侍從ニ任セラレ、武州ノ内ニテ貳萬石ヲ加封シ通計拾萬石ヲ領ス、時ニ年四十六。

寛永十年癸酉

定綱公年四十二。

淀城ヨリ轉ジテ濃州大垣城六萬石ヲ賜フ。

公封土彌加ルト共ニ益ス東照公ノ武家憲法訓戒即チ諸侯憲法ノ御精神ヲ實行シテ、躬行ヲ以テ文武

ノ修養ニ彌勉ムルハ勿論ノミナラズ、自ら奉スル極メテ儉素ヲ以テシ、而カモ其歳入ノ程度ニ應ジテ、天下ノ名士ヲ索メ又一能一藝以上アル者ヲ周索シテ之ヲ召收スルコトニ勉ム。

寛永十一年甲戌

定綱公年四十三。

將軍上洛其七月六日大垣城ニ宿シ、定綱ニ賜フニ左文字名刀並ニ時服及白銀ヲ以テス。且此前年、定綱初メテ大垣ニ入封ノ年、洪水ノ大災、領地被害多キモ、定綱ノ注意周到懇切ニシテ漸領内ノ人民救恤撫育ノ能ク行届キタル事ヲ感賞セラレ、特ニ賞トシテ黄金五千兩ヲ賜ハリ、且直チニ供奉ヲ命セラレテ上京シ而カモ二條城外ノ西南方面田中ニ於テ百間四方ノ地所ヲ賜ハリ、假屋ヲ建設シテ以テ城外ヲ警衛ス。

幾ハクモ無ク、將軍ニ供奉參内シ、從四位下ニ陞叙セラル(七月十八日)。

此月酒井忠勝ハ將軍ノ後乗トシテ供奉、奉拜

龍顔、天盃頂戴、且守家御太刀ヲ拜領ス。

七月忠勝ハ川越ヨリ若州ニ移封シ、若狹全部並ニ越前ノ敦賀郡、江州高島郡ノ内通計拾壹萬三千五百石ヲ賜フ。

是ヨリ先キ、定綱公ノ父隱岐守定勝元和三年丁巳ヲ以テ伊勢國桑名城十一萬石ニ封ゼラレ、從四位少將ニ陞リシガ、在封約十年老病ヲ以テ桑名ニ卒ス年六十四、法諡崇源院殿ト曰フ。其次子定行大坂ノ役功アリ。元和六年己巳伊勢長嶋城ヲ賜ヒ二萬石ヲ領ス。此ニ至リ父ノ遺領ヲ襲ギ、桑名城主ニ任ゼラレ十一萬石ヲ領シ、從四位下ニ叙シ、隱岐守ニ任ジ、寛永十一年甲戌侍從ニ陞任シ、移封シテ伊豫松山城主ニ任ゼラレ十五萬石ヲ領ス。

定行伊豫ニ移封ノ後ニ直チニ其後任トシテ桑名城主ニ最モ適任ナル人物ハ、其際實ニ定綱ニ如ク者無シ。是寔トニ當時英明ナル將軍家光及ビ其補佐タル賢俊老臣酒井忠勝、土井利勝ノ共ニ確認スル所也。

是ニ於テ、此年十一月定綱ハ又移封ノ命ヲ承ケ、桑名十一萬石ノ城主ニ任ゼラル。

寛永十二年乙亥

定綱公年四十四。

此年定綱公初メテ桑名城ニ入ル。

公ノ桑名ニ入ルヤ、夙トニ豫シメ深ク慮ル所アリ、多年是迄深ク研究シ、之ヲ修養シ、之ヲ蘊蓄シタル所ノ撥亂反正ノ事業ノ一部タル、藩翰ノ政、治民安民ノ實效ヲシテ、北勢地方ニ於テ大ニ舉ガ

ラシムベキ準備ヲ整ヘ以テ新領地ニ入りタリ也。
 公入部以後、毎年在桑ノ歳ニ在リテハ、躬親カラ或ハ草鞋脚絆腰辨當(握飯梅干)ヲ以テ、或ハ單騎
 ヲ以テ、封内山川林野ヲ遍ク跋涉シ、以テ地勢風俗人情並ニ人民ノ疾苦ヲ探訪審察シ、之ト同時ニ
 廣ク人才ヲ求メテ適才ヲ各適所ニ用井、殊ニ開拓水利植林等ノ業ニ長シタル人物ヲ招キテ之ヲ用井、
 以テ各其能力ヲ發展セシメタリ。故ニ桑名城附十一萬石餘ノ封土ナル者、定綱初入部ノ時、桑名郡
 ノ内大部分並ニ員辨郡、朝明郡ノ全部及三重郡ノ小部分ダケニシテ此中、員辨及朝明二郡ハ山林原野
 荒蕪未拓ノ地殊ニ多大ナリシガ、公ハ夙トニ其開拓ニ深ク注意留心セラレ、常ニ騎馬若クハ野裝脚
 絆草鞋掛握飯ノ行装ヲ以テ山川原野ヲ遍ク跋涉シテ、其地々々ノ老農等ヲ訪ヒ、親シク之ト款洽シ
 以テ殖産開拓疏水ノ事ヲ大ニ獎勵シタルガ故ニ、就封後數年ヲ出デズシテ、各地開拓ノ基ヲ開カ
 レ、用水及ビ疏水ノ業灌溉ノ道漸次ニ其緒ニ就キヌ。故ヲ以テ、寛永廿年ノ頃ニ及ビテハ員辨、朝
 明、桑名各方面郡町村ノ道路橋梁交通ノ便利彌ヨ開ケ、之ト同時ニ田地用水灌溉疏水ノ便利ハ一方
 ニ於テ彌ヨ開進ヲ加ヘタルガ故ニ、桑名領地ノ收穫モ亦之ヲ寛永十一年ニ比較スレバ著シク増加シ
 タルハ勿論ナルノミナラズ、將來尙ホ彌ヨ發展増加スベキハ必然ノ形勢ニテアリキ。是ニ於テ、公
 ハ些シモ自カラ足レリトスルコト無ク、更ニ彌ヨ勉勵シ、君臣合体一致シテ、藩政ノ振整、領民ノ
 幸福安寧ヲ確保スルコトニ専ハラ熱心努力セリ。

公深ク山林蕃殖ノ事ニ心力ヲ盡クシ、是ヨリ先キ、桑名領ノ西ノ方山々ニハ、元松ノ木ナカリシヲ
 ヒタト峯々ニ植エ付ケサセ、人夫ノ麓ヘ下ルトキ道スガラ一畝ツ、山ヲ打返シ下ルベシト仰付ラレ
 シニ案ノ如ク綠カノ鐵目ニ止リ、御一代ノ内ニ皆松山トハナリス、福尾山ニモ杉苗ヲ植エ付ケ、大
 泉原ニモ松林、白山川ナミニモ檜ノ木ノ類、堤ニハ榊檀、楮等毎年植エ付ケサセ、宇治ヨリ茶ヲ取
 寄セ西方村ニ播セ玉フ、又海面ニ亂杭ヲ打チ、所々ニ霞簀ノ卑キヲ當サセラレシガ、ソレ故ニヤ町
 屋川ノ裾遠淺ニ成リテ、圓鏡公ノ頃ニハ新田下地ニナリシトゾ。

員辨郡笠田ノ溜池ハ公ノ計畫ニ出デ、寛永中多度山ノ南麓市原村諸溪ノ水ヲ引キ、堤ヲ築キ、溜池
 ヲ造ラシメラレタル者ナリ、北ハ山麓ニ據リ、南ハ平原ヲ帶ビ、南北四町餘、東西三町許、堤ノ高
 ツ七八尺、長サ二百間、上流ノ方ニモ小堤アリ、山水暴漲ノ時水ヲ外ヘ落シ堤決ヲ防グ爲ナリ、此
 溜池成リテ灌溉ノ便ヲ得、開墾スル所數萬石、笠田、宇野、大泉新田等ノ諸村長ク此水ヲ仰グ、溜
 ヲ造ラシメ玉ヒシ時公ハ親カラ時々此ニ巡臨シ、自ラ工事ヲ指揮シ農夫ト親ク語り玉ヒシトゾ、今
 ニ至リ、此數村人民殊ニ遺徳ヲ仰ギテ長ク忘ル、事ナシ。

員辨郡平野新田モ亦寛永中開墾ヲ命ゼラレシ地ニテ、御家號ノ字ヲ賜ハリ、平野新田ト名付ラレ、

民家數十戸安住ス、深ク公ノ恩德ヲ感シ奉リ、其祠ヲ立テ平野大明神ト崇仰シ奉ル。又御名ヲ掛物ニシテ拜スルトゾ、開墾ノ頃屢御來遊アリ、別館ヲ設ケラレ、御茶屋、的場、馬場等アリシガ後圓鏡公高田移封イトキ、其館舍ヲ里正ニ賜ハリ、其宅ニ移シヌ、神社ト共ニ今猶儼存シ村民長ク崇仰ス。

桑名郊外東海道ナル町屋川、朝明川等古ヨリ架橋ノ設ケナク、夏ハ洪水、冬ハ沍塞ニテ往還ノ旅人甚ダ難儀ス、公ハ之ヲ察シ玉ヒ御入部以後橋ヲ架ケシメ、往來ノ勞ヲ救ハセラル。

員辨川ノ上流片樋明神ノ前ナル流レハ、深瀬ニシテ古ヨリ舟ノ通航ナリ難ク、若舟ヲ上ス事アラバ忽ニ覆ス由、俗ニ傳ヘテ明神ノ御咎ナリト云フ、公御巡見ノトキ其村ノ長ヲ召シ、夫レ神ハ民ヲ惠ムヲ以テ第一トシ玉フ者ナリ、イカデ人ノ害ヲナシ玉ハンヤ、以來懼ル、コトナク舟ヲ通ハスベシモシ害アラバ眞ノ神ニ非ズ、速ニ打破リ此河水ニ流シ送ラント、打笑ヒテ舟ヲ上セラル、ニ事故ナシ、是ニ因テ威徳神ニ越エ玉ヘリト皆人感シ懼レ奉リヌ。

桑名城ノ西約四里弱、深山福尾山アリ。此福尾山毘沙門堂ノ近邊ヲ往來スレバ、毘沙門ノ祟リ又ハ天狗ノ障リアリナド云傳ヘテ通路絶タリシヲ、公開玉ヒ我封内ニアリテ我民ヲ害シ玉ハン事争デア

ルベキ、トテ速ニ其所ノ大木等多ク伐ラセラル、ニ、何ノ障リモナク其後ハ人民心安ク往來シ木コリ場トハナリス。

公ハ又尾州ノ瀬戸村ヨリ陶器師ヲ召シ、桑名西方村ニ於テ陶器ヲ造ラシメ、幕府ヘノ献上、諸家ヘノ進物ニモセラレ、諸臣ニモ賜ハリシトイフ。

公平生士ヲ愛シ、賢ヲ尙ビ、之ガ爲メニハ些シモ俸祿ヲ吝マズ。又文武ノ事業及ビ民ヲ救ヒ、公ニ奉ズル事ノ爲ニハ財ヲ吝マズト雖モ、而カモ其自カラ處スルヤ、常ニ節儉ヲ守リ玉ヒ、桑名ニ在ス時年中五千石ノ御暮シナリ、御初知五千石ヲ忘レザル思召ナルベシ、衣服ハ有合ノ木綿小袖ヲ召シ、曾テ美麗ヲ好マズ、柿染ノ上下小紋櫻ボウフリ、羽織モ柿染ノ布木綿ヲ用非、食物モ有合ノ料理ニ任セラレ、大概一汁一菜ニ過ギズ。

寛永十三年丙子
公年四十五。

此年江戸城火災ニ付翌十四年壬子正月諸大名ニ命ジテ之ヲ再造セシム酒井忠勝之ガ總奉行ニ任セラ

ル。

寛永十四年丁丑

公年四十六。

此年島原賊亂起ル。

定綱公書ヲ將軍ニ上ツリ、自カラ往テ征討ノ事ニ從ハムト願フ、將軍之ヲ許サズシテ、而カモ亦之ヲ慰諭シテ曰ク、若シ予ガ親征ヲ要スルコトト爲ルニ至ラムニハ、卿ヲシテ必ズ隨行セシムベキ也ト云々。

島原賊亂ノ時、定綱公ハ深ク慮ル所アリ、乃チ戰陣視察トシテ、藩士山田甚五左衛門、寒田市兵衛ヲ島原ニ遣ハサル、兩人共ニ能ク働キ、寒田ハ冬ノ陣ノ石打ニ手負、山田ハ正月元日ノ城攻ニ討死ス、家來仁兵衛ヨク戦ヒ主人ノ首ヲ敵ニ渡サズシテ引揚グ、公ハ又重ネテ藩士山岡喜左衛門ヲ遣ハサル、落城ノ後歸リシヲ速ニ召サレ、地理攻口ノ様子等問ハル、トキ、近臣ヲシテ御臺所ヨリ米俵ヲ取寄セ解キ散ラサセ、是ヲ以テ山谷ノ地形ヲ作りテ云ヒ聞カセヨト宣ヒ、其通りニシテ申上ゲケレバ、忽チ了解セラレタリシトゾ、三人ノ御物頭ニ從ヒ行キタル足輕ハ殘ラズ島原ヲ名乗ラセ、羽

織ニ島原何某ト染サセ、火事羽織等ニ用井サセラレタリキ。

寛永十五年戊寅

公年四十七。

此年島原賊亂平定ス。

幕府和蘭人ノ忠勤ヲ嘉ミシ、之ヲシテ長崎出島ニ居ラシメ、有限的通商交通ヲ特許ス。

和蘭人ヲ除ク外一切西洋人ノ船舶ノ交通出入ヲ嚴禁ス。

此年酒井忠勝特ニ大老ニ任ゼラレ、將軍ノ前ニ在リテモ頭巾ヲ冠リ安座ニルコト自由タルベキ旨ヲ命ゼラル。忠勝時ニ年五十二。

公平素極メテ士ヲ愛シ、吉村又右衛門、高松内匠等ヲ始メ、武功アルモノハ高祿ヲ以テ抱ヘラレ、其他長臣久松、與平等ノ老功ノ者ヲ集メ、且暮相伴セシメ、飯後留置キ日長ケ夜更ルヲモ覺エズ政事軍旅ノ事ヲ語り、合戦ノ勝負ヲ吟味シテ、治世ニ亂ヲ忘ルル事ナシ、食事ノ時良士ノ相伴多ケレ

バ、御氣色殊ニ快然タリ、其外藩士ノ中年若キ者ハ、萬事城中ノ事見習ノタメ又ハ御側近ク召サレ
其一言ニモ才不才ヲ試ミラレ、御目見エ濟ミタル嫡子共ハ、組合ヲ立置レ、常々五人程召テ御通
ヒ杯モ仰付ラレシトナリ。

公ハ其藩中ノ士卒上下共ニ其人ヲ知り、各其得タル道ヲ以テ之ヲ使ヒ玉ヒ、上ハ長臣ヨリ下ハ人足
ニ至ル迄、一人モ餘ル事ナク間隙ナク召使ハル、馬取中間ニ至ル迄真心ニ能ク勤ムル者ハ、立身限
リナシト思ヒ、大ニ望ヲカケ勇マシク見エケリトナン、公常ニ一生ノ内ニ侍百萬手足ヲ置カセズ使
ヒタキ者ナリト仰ラル、聞者皆其大器ヲ感シ奉ル。

政事嚴ニシテ大身ト雖、少シモ枉ゲテ爵ヲ輕クスルコト無ク、中間等ニテモ枉ゲテ重クスルコト無
シ、御仁恕亦至テ深ク、凡家中ヨリ市町村ニ至ル迄、賞罰正シク節制立テ少シモ滯ル事ナシ、假令
五ヶ國十ヶ國乃至四海ノ御仕置執事シ玉フト云フトモ敢テアグミ玉フ事アラジト皆人稱シ奉リヌ。

公人ヲ知ルノ鑑識ニ富ミ、善ク名士ヲ召聘シテ之ヲ用非ラレタル事ハ言ヲ俟ズ、其他人ヲ知ルノ明
鑑屢バ著ハル、一年定勝公ノ忌日ニ當リ、増上寺ノ僧標隨、知鑑及某ノ三人ヲ招キ玉ヒシガ、飯後標
隨戲レテ智鑑ハ是一山ノ惡僧ナリト申シケレバ、公智鑑ハ棟梁ノ器アリ、必ズ本寺ヲ踐マント評セ

ラル、標隨又曰ク某ハ是レ一山ノ良人也、公コレヲ熟視シ某モ亦衆ヲ掌ルノ機アリ、必ズ大寺ヲ持
タント評セラル、各悦ビテ歸リシガ、後智鑑ハ知恩院ニ住持シ、某モ亦鎌倉光明寺ニ住ス、皆公ノ
言ノ如シ、又江州ノ工匠辻内ト云者ヲ招キ寄ラル、其質甚鈍ク其言最遲シ、皆は何ノ用ゾヤト云ヘ
リ、然レ共公ハ辻内ガ家業ニ明カニ工匠ノ事ヲ得タルヲ察シ、終ニ之ヲ扶助シ刑部左衛門ト稱セシ
ム、一年江戸大地震諸侯ノ屋室或ハ倒レ、或ハ傾ク者勝テ數フベカラズ、公ノ居館モ亦然リ、此ニ
於テ辻内ヲシテ之ヲ修メシムルニ、日ヲ移サズシテ成ル、皆曰ク古今ノ能工ナリト、諸侯傳ヘ聞キ
線ヲ求メ、公ニ請ヒ辻内ヲシテ傾覆ノ屋室ヲ修メシムル事甚多シ、其後圓鏡公ノ時、京都大地震ニ
條ノ御城傾ク事甚シ、工匠ヲ召シテ量ラシムルニ、皆毀ツニ非ザレバ修補スル事ヲ得ズ、人夫ノ費
甚多カルベシト申ス、時ノ在番中根日向守辻内ノ事ヲ知リテ、コレヲ乞ヒシカバ、即遣ハサレシニ
辻内コレヲ見テ、修補スベシ人夫ヲ用ル事三十人ニ過グベカラズト云フ、諸工匠皆疑ヒ誹ル、辻内
人夫三十人ヲ指揮シ殿閣ニ入り、或ハ楔ヲユルメ、釘ヲシメ、重リヲカケ、綱ヲツケ、是ヲ修ムル
ニ時ヲ踰エズシテ成ル、上下甚賞美セリ、事台聽ニ達シ、祿百石ヲ賜ヒ棟梁ノ中ニ加ヘラル。又公
ガ淀在城ノ時、市中ニテ幼童ノ盲者ヲ見、是レ類ヲ越ユルノ相アリトテ、人ヲシテ其父母ニ請ハシ
メ、琵琶ヲ習ヒ平家ヲ學バシメラル、數年ヲ經ズシテコレヲ能クス、閑暇ノ時侍坐シテ、琵琶ヲ彈
シ琴ヲ彈キ平家ヲ諳フ中ニ暗記シテ遺失ナク、聲音節ニ中リ御心ニ稱フ、此者姓氏モ賤シカラザル

由ヲ聞召テ、マスノ愛憐ヲ加ヘラレタリケレバ、忝キ心骨髓ニ徹シテ應對實ヲ盡ス、後勾當トナ
リ平野元都ト云シガ、終ニ檢校トナレリ、是等ノ類人皆公ノ能ク人ヲ知り玉フ事ニ感ズ。

公若年ノ頃ヨリ常ニ神祇ヲ崇ビ玉ヒ、桑名ニ入部セラレシ後、城内城外ノ神社ヲ修メ、社領ヲ附ケ、
舊跡ヲ尋ネ、竹木ヲ植付サセラレ、神威自ラ崇クナリヌ。

桑名香取法泉寺ハ、天正ノ頃、東照公豊臣氏兵ヲ構ヘ玉ヒシ時、住持空明御味方セシカバ、後寺領
百石ヲ賜ハリシ事ヲ聞カセラレ、寺地ヲ拓キ、林ヲ附ケ、證文ヲ賜ハリヌ、又大垣ニ在セン時ニヤ
美濃國勝山^{初ハ岡}安樂寺ハ關ケ原ノ時、東照公御陣營ノ地ナレバ、松敷高本ヲ植サセラル。

公自ラ文武ノ業ヲ勉メ、而カモ藩士ノ子弟等其志アリトモ師ナクシテハ徒ラニ日ヲ送ルベキヲ惜ミ
爲ニ朝日丸ニ學校ヲ建テ文學ヲ始メ、弓馬兵術書數禮儀ニ至ルマデ、ソレノ師ヲ建テ之ヲ學バン
メ、其堂ノ額ニ長壽院ノ嶺室和尙ヲシテ、洒掃應對ノ文字ヲ書セシメラル、前ニ的場アリ、後ニ算
勘所アリ、傍ニ廐アリ、大路ニ馬場アリ、乘馬ヲシテ四季鐵砲ノ音ヲ聞キナレサセ、且暮驅馳ヲ學
バセラル、廐ニハ常ニ鞍置馬三頭ヅ、繫ガセラレ、コレヲ番馬ト云フ、即チ急用ノ備ヘナリ、每
年正月ニハ馬場ニテ御乗初アリ、諸士ノ馬術弓炮輕卒ノ弓炮等御覽アリ、一年男山ヨリ幣ヲ受ケ歩

射ヲ行ハレタリシモ此所ナリ、又或時ハ舞臺ヲ設ケ能樂ヲ催サシメラレタル事モアリシトゾ。

公ハ常ニ躬行ヲ以テ藩士ヲ導キ、武藝修行ニ怠ラズ、劍術ハ若キ頃ヨリ柳生流ニ達シテ別ニ一派ヲ
立テ、甲乙流ト名付ケラル、馬ヲ驅リテハ遠乗海乘ヲ修練シ、船ヲ浮ベテハ河海ノ進退ヲ工夫シ玉
ヒ、凡其業ニ長ゼル者數十輩、皆平生之ト懇ニ交ラレタリ。

公ハ又平生武具許多貯ラレ、桑名ニ有ル所ノ鐵炮凡四千余挺、玉藥幾何ト云フコトヲシラズ、弓矢
旌旗、甲冑、馬具、荷鞍等ニ至ルマデ、盡ク豊カニ充備セリ、江戸邸中ニ備ヘラル、所モ亦頗ル多
シ。

公在城ノ時ハ、屢士卒ヲ率井、城外ノ山野ニ猪狩ヲ催サレ、法制ヲ嚴ニシ、隊伍ヲ整ヘ、軍旅ノ法
ヲ講ゼラル。

桑名城下川口ハ、舟ノ出入スル所ニシテ、東西ノ旅客往來ノ要地ナレバ、殊ニ心ヲ付ケサセラレ、
常ニ番士ヲ置キテ守ラシメ、忍ノ者ヲモ差置レシトゾ。

御徒頭ハ十人ニテ一組十人ヅ、ナリ、内小頭一人目付一人平八人ナリ、當時他ノ藩々多クハ其渡リ者ヲ用非ル習ヒナリシヲ、公ハ之ニ反シテ國々ヨリ召シ抱ヘラル、是ハ國々ノ土地ノコトヲ尋スベキ爲也、且上杉謙信馬廻ニ三百人ノ士ヲ撰ビタル意ニテ、右百人ノ徒士ヲ御馬廻ニ召連ラレテ、働ヲ強クスベキ爲トゾ、又大島八左衛門へ臨時ニ預ケラルベキ御手當トモ聞ユ、八左衛門ノ言ニヨリテ柿染ノ羽織ヲ着セシメラル、兩面ニテ一面ハ假名ヲ染メキ火事ノトキ用ユ平生ハ無地ノ方ヲ用ユ、柿色ハ夜モ見ヘズ、血付ヲモ見エズトナリ、凡徒士ハ容体ニ拘ハラズ、唯必ズ其實地ノ用ニ立ツベキモノヲ抱ヘラル、故ニ由緒宜キ者モ來リ仕ヘ勤方能キ者ハ追々御取立テ有リシ者多シ、此大島ハ忍ノ名人ナリ、其外伊賀甲賀ノ忍ノ達者多ク召抱ラル。

組頭ニ組ノ士預ケラル、コトハ、父子或ハ縁者或ハ舊來ノ由緒有リテ心易キ者ヲ預ケラル、夫レ故一組中一和シテ、頭ノ下知ヲ守ルコト尤厚カリシトナリ、惣テ士分ノ組預カル者ハ皆組頭ト稱セラル。

公ハ組頭ノ人物ヲ選ミテ之ニ任ジ、平素軍備ヲ整ヘシメ、組頭ニ知行所ヲ處々ニ賜ハリ、與力足輕等ヲ添ヘテ諸口ノ手宛ヲ定メラレ、其外諸組頭、物頭、諸奉行數多置カル、是ハ自然ノ事有ラムトキ近國ノ諸浪人地下ノ侍等ヲ一時ニ招集シ、ソレ々配リ預ケラルベキ爲トゾ、浪人共ニモ常ニ内々

御手宛アリ、京都計リニテモ三百人扶持ヲ給セラル、御領分百姓ノ中ニテモ筋目有リテ氣性ヨク働キアルモノニハ、少シ宛田地ヲ賜ハリ、常ニ威ヲ付ケ置キ、自然ノトキ百姓ヲ集メ一隊トナサルベキ爲ナリトゾ、又桑名城下春日社石取り祭禮ノトキ、三十六町ノ年寄ヲ大名ニ作り、町人ヲ組下トシテ隨從セシメ、祭禮ノ場ヲ周廻セシメラル、カク市長ニ武士ノ法令ヲ習ハシメ、變アルトキノ用ニ備ヘ玉フ思召ナリトゾ、是ヨリ市町村里ニ至ル迄甲冑馬具等ヲ求ムル者多クナリヌ、又春日祭禮石取祭ノ車ナル者ハ不虞ノ時町屋川原へ引出シ、井樓臺トセラルベク軍備ノ一助ニ供スベキ爲ナリトゾ。

公ハ常ニ近國ノ方々ト平生ヨリ親ク之ト交リヲ厚ウシ、又事ニ臨ミテ用ニ立ツベキ者ニハ、ソレ々之ト懇ニシ、其外自然ノ御備至ラザル處ナク、他人ノ知ルヲ得ザルコト多シ。

公ハ軍國ノ事ニ平素深ク遠キ慮リヲ蓄ヘ、乃チ後鑑參考ノ爲、古書或ハ繪圖等ヲ常ニ集メ置カル、京都十如院ニ弓馬故實ノ古書百卷秘藏セル由聞キ玉ヒ、近臣ヲ遣ハシテ悉ク寫サシメラル、寛永年中肥後ノ加藤殿斷絶ノ跡御仕置トシテ稻葉丹後守正勝朝臣ヲ遣ハサル、此時公淀城ヨリ使者ヲ途中迄遣ハサレ、御立寄アルベキ旨仰遣ハサル、程ナク正勝朝臣淀ニ到着セラレタレバ、御下屋敷ニ於

ヲ御饗應アリ、終リテ後御閑談ノ節、肥後國ノ繪圖御持參アリシヤト公ハ問ハセラレシニ、正勝朝臣持參致サズト答ヘラレシカバ、公ハ直チニ近臣ヲ召サレ、肥後國圖一枚持參セヨト命ゼラレ、乃チ之ヲ正勝朝臣ニ進ゼラル、正勝朝臣押戴キ將軍家ニモ簡様ノゴト思召サレケルニヤ、從ヘ立寄リ越中守ニ逢ヒ候テ罷下ルベシトノ上意ニテ候ヒシトテ、殊ニ悅バレシトゾ。

公桑名ニ就封セラレシヨリ以來、益城郭ヲ修補シ、二三ノ郭ノ外ニ二ツノ郭ヲ設ケ玉フ、曰ク對面所、曰ク朝日丸、御家族松平定寛、服部正辰以下長臣各之ヲ監ス、此時井ヲ數ケ所ニ穿テ、土壘石壁ヲ築キ、柵ヲ施シ、樓閣數月ヲ經ズシテ成就セリ、朝日丸、吉之丸、東ノ方海表へ築キ出シ、掛ヲ掛ケ、新屋敷ノ郭ヲ南ニ廣メラレシコト、皆公ノ時ニアリ、桑名城ノ規模公ニ至テ全成スト云フ。

正保三年丙戌

公年五十六。

此年公其親信スル老臣三輪權右衛門元辰ヲ使トシ、禮ヲ厚ウシテ江戸ノ處士山鹿甚五左衛門高興即素行ヲ訪ハシメ、日ヲ期シテ之ヲ召見シ、終ニ躬親ヲ贊ヲ執リ、誓盟書ヲ作り、以テ素行ノ門弟ト

爲ラレタリ。

定綱公晩年之御自著ニ旭丸學校掟書及ビ勸學家訓有リ、而カモ其要旨ハ左ノ如シ、士タル者能ク敬ミテ師ノ教訓ヲ受ケテ、而カモ聖人ノ教旨ヲ體認シ、心神ヲ正シ、進退言動ヲ慎シムヲ以テ大本トス。

爲士者宜ク能ク其本業ヲ辨シ、常ニ能ク射御之法ヲ練リ、且能ク七書ヲ諳熟シテ、而カモ講義直解等之註釋及戰國勇士之事迹名將之計策ヲ考究スベシ。

之ヲ要スルニ士タル者ハ、只能ク道ヲ學ビ過不及ヲ能ク辨シテ常ニ自己ヲ省ミ知り、以テ各其業ヲ勤ムベシ。

乃茲ニ家訓ヲ垂レテ以テ所令教戒也。

正保四丁亥十一月二十八日 源 定綱

ト記セラレタリ。

謹按 正保三丙戌ハ西曆一六四六年ニシテ、定綱公御年五十六歳ニ當ル。
 此年恰カモ山鹿素行ガ年二十五ニシテ而カモ定綱公ガ、是ヨリ以前ニ共ニ交リ共ニ學バレタリシ
 所ノ小幡勘兵衛等ノ人物學識ト、山鹿素行ノ人物學識トヲ深ク比較シ、彼此ノ優劣高低大小ヲ審
 按セラレタル結果ノ彌ヨ顯ハレタル歳ニテ有リキ。
 即正保三丙戌定綱公ハ其ヨリ前、山鹿ノ人物及其學識ノ深宏ナルコトヲ確認セラレタルヲ以テ、
 茲ニ始メテ山鹿ニ面會シ、寬晤款談政治軍事及ビ經濟並ニ教育等ノ諸要務ヲ論談セラレタル後ニ
 於テ、山鹿ノ言フ所悉ク公ノ心肝ニ徹シタルヲ以テ、一見忽チ舊知ノ如ク直チニ禮ヲ厚ウシテ山
 鹿ト師弟ノ誓約ヲ結ビ玉ヘルコトハ實ニ此正保三丙戌ノ年ニ在リ。而カモ前掲定綱公自撰旭丸學
 校ノ提書、勸學家訓ノ要旨ハ、正サニ素行ノ著聖教要錄及ビ武教小學ノ主義精神ト恰カモ相暗合
 ス、是公ガ山鹿ノ門人ト爲リ玉ヒ、師弟ノ誓約ヲ成シ玉ヘル翌年丁亥ノ御自著ナルガ故也。
 定綱公ト、山鹿素行トノ双方相互心契神交ノ深キ、此クノ如キニ至レル所以ヲ究メムガ爲メニ山
 鹿ノ略歷一斑ヲ左ニ附記ス。

○山鹿素行ノ畧歷其定綱公トノ關係ノ一斑

山鹿甚五左衛門高興ハ、元和八年壬戌ノ歲八月二十二日（西曆一六二二年）ヲ以テ、奥州會津ニ生
 ル、高興幼名ハ佐太郎、父ハ山鹿高道、元ト伊勢龜山城主關一政ニ仕ヘ二百石ヲ食ム、後故有リ脱
 藩シテ會津ニ赴キ、其舊友町野左近ニ寄ル、左近ハ祿三萬石ヲ領シ、蒲生家ノ老臣タリ、町野ハ高
 道ニ與フルニ年俸二百五十石ヲ以テシ、上賓トシテ厚ク之ニ遇シ、侍女ヲ選ミテ高道ノ妾タラシム
 姪身男ヲ生ム、即チ佐太郎也。

蒲生家亡ビテ後、町野ハ幕府ニ仕ヘ百人組ノ長ト爲ル、高道ヲモ薦メテ幕府ノ騎士タラシメムトス、
 高道固ク辭シ、長男 佐太郎ノ異母兄 總左衛門ヲシテ巳レニ代ラシメ、而カモ自カラ薙髮シテ醫師ト爲リ、
 改名シテ玄眞子ト號シ、江戸ニ移住ス。時ニ元和十年甲子也。

佐太郎幼ヨリ非常穎悟、一ヲ聞テ十ヲ知り、岐嶷絶倫、故ニ和漢ノ經史並ニ兵學及ビ神道及老莊諸
 子百家之書並ニ佛氏之諸教義ニ至ル迄、悉ク通曉セザル所莫シ。

佐太郎長スルニ及ビテ、改名シテ甚五左衛門ト稱シ、初ハ高祐ト名乘リシガ後ニ改メテ實名ヲ高興
 ト曰ヒ、字ヲ子敬、號ヲ素行ト曰フ、朱舜水ノ名ツクル所也。

紀伊大納言、加賀中將及阿部忠秋等ツテ素行ヲ招聘セムト欲シ、加州侯綱紀ハ其祿七百石ヲ以テ

之ヲ招ク、素行ノ父玄真子之ヲ固辭シテ出デス。
 寛永ノ末、定綱公モ亦素行ノ著述諸書ヲ看、之ヲ審閲シテ其人格ノ高潔ナル其見識ノ活大卓越ナル
 コトニ深ク感服セラレタリケレバ、御近親淺野因幡守並ニ御親知酒井讚岐守忠勝公、北條安房守等
 ト共ニ山鹿素行ノ人物寔ニ宏大卓偉ナルコト、其經濟文武ノ學業宏博深遠ナルコトヲ認メ、終ニ躬
 親カラ恭シク門弟子タルベキ適當謙遜ノ禮節ヲ執リテ、山鹿ノ門ヲ訪ヒ玉ヘリ。定綱公當時山鹿ニ
 對スル御誠心求道請益受訓ノ事實ハ、明ラカニ記サレテ、山鹿素行自著配所殘筆之内ニ在リ左ノ如
 シ。
 拙者二十五歳之時（正保三年丙戌、西曆一六四六年）松平越中守殿、拙者ヲ御呼被成學問兵學之御詮
 議御議論御座候末拙者申上候通御得心被成別而御大慶被成。則被爲遂御誓約狀候而拙者ニ兵學御相
 談被成候。
 右御誓狀之翌日三輪權右衛門ヲ豫メ先キ達トシテ被差遣御太刀馬代並ニ時服ヲ被下候嗣而越中守自
 身爲御禮、私宅江御臨被成下候。
 其以後ハ每度御懇篤之御詩文折々御贈答被成下候。
 拙者ノ文章ヲ書キ候ヲ表具被仰付候而拙者ヲ御招待之時分其ヲ御座敷江被掛候誠冥加之至。却而迷
 惑仕候段、度々御斷申上候其段ハ淺野因州公善ク御存知當々被仰出候。

越中殿御事ハ其頃五十六ニ被爲成御門葉ト申、御譜代之御大名中ニハ珍敷御學問ニテ兵法ハ尾畑殿
 印可迄御究メ東海道一番之御大名。人皆崇敬仕候處、拙者御信仰不一方候間御答問之義迄精シク書
 付置候其段今以家中衆被存候。

大猷院御前江祖心尼昵近仕ラレ候時分祖心被申候者其元義御序御座候テ具サニ達上聞候折々其元事
 上意有之候間必諸家中へ奉公ニ罷出候事無用ニ可仕候何卒御家人ニ罷成候様ニ執持可被申候旨被申
 候松平越中守殿、拙者御念頃故右之次第具サニ御内意申上候處其者一段之事ニ候表向越中守殿御執
 持可被下候其元事松平伊豆守殿兼而善御存知相成候間當公方様江被召出候様ニ仕早速首尾可仕候祖
 心江モ其段御相談可相成間先以酒井空印殿江モ被仰遣故掛御目置候へ逆越中殿御家老三輪權右衛門
 ヲ被差添空印殿方江拙者同道紹介被遊懸御目候。

其後越中殿被仰候ニハ、酒井空印公江拙者之事具ニ御物語被成置候間左様心得ラレヨ云々
 其後上意ニ依リ空印公祖心下屋敷江振舞被成候時ニ拙者モ其席江被召出、御懇之上拙者之噂ヲ越中
 守殿ヨリ具サニ傳承候由空印公御挨拶有之候。

其後慶安四年辛卯

此歲四月大猷公御薨去松平越中守殿御病氣其年十二月是亦御逝去被成候。

其翌壬辰改元

承應元年淺野内匠頭殿拙者江直ニ約束被仕候テ色々懇之上知行千石被宛行候。

我等得御意候テ、兵學學問御聽被成候御方々ハ、松平越中守殿ヲ始メ、右ニ申候如ク別テ御崇被成候。

其外板倉内膳正殿御老中ニ被爲成候テモ拙者處江御狀ニハ拙者名充ニ様之字御附相成候故度々御斷申上候得共不被聞召分候。

此年定綱公ノ母故少將松平定勝ノ夫人與平氏逝去セラル、與平氏ハ其所生男子六名アリ曰ク定吉、曰ク定行、曰ク定綱、曰某、曰ク定房、(今治藩祖) 曰定政、定勝在世中ハ桑名ニ在リシモ、寛永十一年甲戌定行ガ松山ニ移ルニ及ビ夫人以爲ラク、予レ少時ヨリ良人故少將定勝ニ事ヘ、衆子ヲ愛育シテ各國家ノ干城ト爲ラシムルコトヲ得タリ、故良人少將公

ニ對シテ、耻ル所無シ、復何ノ遺憾カ有ラン。

但少將公崇源院殿ノ墳墓桑名照源寺ニ在リ。而カモ三郎定綱幸ニ桑名ノ新城主ト爲ルノ恩命ヲ承ク、故ニ予ハ定行ト別レテ桑名ニ留リ以テ遠カラザル時期ニ於テ、同穴ノ天約ヲ完フセムコトヲ誓フヲ當然トスト。

乃チ此趣旨ヲ定行定綱ニ語ル、兩君共ニ母公ノ深慮貞節ニ服ス。是ニ於テ、母公與平氏ハ終身桑名城内ニ之丸ニ住居セラレ。定綱公ハ篤ク孝養ノ道ヲ盡クサレケレバ、母公ハ老後ニ至ル迄欣然安泰ノ生活ヲ完フセラレタリシガ、正保三年丙戌七月廿四日壽七十七ヲ以テ桑名城内ニノ丸殿ニ於テ逝去セラル、乃諡シテ松源院殿ト曰ヒ、之ヲ桑名城西ナル照源寺即チ故少將崇源院殿定勝公ノ墓側ニ葬リ玉ヒス。

正保四年丁亥

公年五十七。

此年支那明末ノ大亂明ノ遺臣鄭芝龍等ヨリ援ヲ日本ニ乞ヒシ時、幕府ノ議論區々ナリシニ、公遠クハ日本ノ制ト異邦ノ例トヲ量リ、近クハ兵糧運漕ノ勞ト軍功恩賞ノ費トヲ慮リ玉ヒ、吾國ヨリ救ヒ玉フ時ハ必ズ後ノ患ヲ殘スベシトテ、一書ヲ執政ニ贈リ、細カニ論ジ玉フ、此事上聞ニ達シ、援兵

ノ議遂ニ已ミシトゾ。

慶安元年戊子四月大猷公日光御社參ノ時、公ハ供奉シテ今市ノ警衛ヲ勤メ玉フ、此時密ニ弓、鐵炮各數百挺、長柄數百本、旌旗等ノ兵具ヲ持セラル、此事知ル人ナシ、自然ノ事モアラバ取合ハセ御用ニ立ツベキ思召ナリトゾ。

慶安三年庚寅

公年五十九。

此年冬公中風ニ罹リ、醫療效アリ稍快愈ニ向ヒツ、アリシモ、其翌年四月廿日大猷公ノ病薨ニ會シ、公之ヲ聞キ深ク悲悼ニ不堪。是ヨリ行歩不自由ヲ患フ。

同四年辛卯九月

公病ヲカメテ桑名ヲ發シテ江戸ニ參觀セラレタリシカバ、將軍嚴有公、公ノ、舊功ヲ勞ヒ病ヲ問ハセ玉フ專甚懇切ナリ、是ヨリ病身歩行ノ勞ヲ思召サレ江戸城ノ御玄關前冠木門迄乘輿ヲ許サル、其後病氣御尋子トシテ上使ヲ下サル、十二月二十五日御病革マリシ時、起テ東方ニ向ヒ、瞑目シテ長逝

シ玉フ、平生ニ死期必ズ東ニ向フベシ、東ハ是日光山東照宮御鎮坐ノ地ナリト宣ヒシガ、此時ニ至リ果シテ其御詞ニ違ハザリシトナリ、御遺言ニヨリ髮ヲ剃ズンテ棺ニ納メ奉ル、法諡大鏡院殿玄運社定譽一法大居士ト云フ、享年六十、江戸靈巖寺ニ於テ荼毘ノ上、其遺骨ヲ桑名城西照源寺ノ後山ニ藏メラル。

公逝去ノ後百三十年ヲ經テ、天明四年辛丑公ノ裔孫白河城主越中守定信始メテ善ク公ノ遺志ヲ繼紹シ、藩政積年累世ノ弊習ヲ大ニ革新シテ以テ白河藩ノ光輝ヲ發セシムルト同時ニ、其藩始祖タル大鏡公ノ靈社ヲ白河城内三ノ丸北小路山上ニ建設シテ、之ヲ御靈屋ト稱シ以テ反始報本ノ大義ヲ明ラカニシ、而カモ寛政九年丁巳ニ至リ、更ニ此廟社ヲ改稱シテ、鎮國大明神ト云フ。事ハ定信ノ傳記ニ詳カナルガ故ニ宜シク參看スベシ。

文政六年癸未松平定永封ヲ桑名ニ移サルルニ及ビ、鎮國神社モ亦桑名城内本丸ニ遷座セラレタリシガ、明治十三年更ニ縣社ニ列セラル。

定綱公年譜略終

附錄遺事

公ハ非常ノ大器ナレ共、亦人家日常ノ細カキ事迄モヨク知り玉ヒヌ、年頭ニハ老臣ノ妻モ皆登城拜謁シテ親シク御物語等モコレ有リ、一同何レモ同道ニテ罷出デ御祝儀申上グル古法ニテ、木綿ノ茜染ヲ着用スル事ノ由、其節御意ニ吉村將監妻ハ花ヨメナレバ、切り立テノ漸ラシキ茜尤ナリ、兵藤入右衛門女房洗濯シタル茜着用是亦尤ナリ、併シ糊ノ仕様アシク見苦シ、糊ハ裏ヨリ致スモノナリ、重テハ左様ニ仕候ヘト御教アリテ笑玉フ由、古老申傳フ。

佐藤弘庵宣中ハ、儒學ヲ以テ公ノ聘用スル所ト爲リシガ、其後今ヨリ七書ヲ讀ミテ武備ノ用ニ立ツベシトノ公命ニ由リテ兵學ヲ講究シ、後深ク得ル所アリテ常ニ御側ニ召テ共ニ軍旅ノ事ヲ談セラレタリシガ、公ノ御議論ノ高キ事跋テ及ブ可カラズト常ニ感歎セシトゾ、高野及尾州ノ騷動、又長崎ヘ外國船來リシ節、皆宣中ヲ其地ヘ遣ハシ様子ヲ觀察セシメラレタリ。

御工夫ノ軍書有リシ由ナレ共、後ニ傳ハラズ、瀬板ト云フモノアリ、屏風ノ如ク疊ミテ二枚トナス、具足箱、挾箱等ヲ入レテ持行ク者ナリ、手綱ト云モノハヅナノ如クニシテ、瀬板ニ巻付ケテ持ツ、軍中用多シ、皆御工夫アリテ製セシメラル。

公ガ特殊ノ賞トシテ、將軍家ヨリ黒棒ノ乘輿ヲ拜領シ玉ヒシ事ニ關シテ、淺野因幡守長治朝臣嘗テ其事由ヲ公ニ親ク問ハレシニ、是ハ誠ニ過分ニモ又有難キ事ナリト答ヘラレタルノミ、凡テ分ニ過ギタル事ハ口外セヌコソ、殊勝ナレ、ト人々申シケルトゾ。

按ニ本文ニヨレバ、此事當時已ニ知ル人ナク、公モ口外セラレザレバ、況シテ記録ノ存ズル事アル可ラズ、今姑ク世ニ傳フル所ニヨルニ、元和八年四月台徳公日光御社參還御ノ節、宇都宮城ニ宿セラル、然ルニ城主本多上野介逆謀アル由告グル者アリケレバ、諸老臣ニ謀リ玉ヒシニ、皆申サレケレバ、越中守コソ幸ヒ將軍家ニ似奉リ殊ニ智勇アル者ナレバ、密ニ御名代仰付ラレ、將軍家ハ火急ノ御用ニテ越中守ヲ江戸ヘ御使ニ遣ハサル、旨披露シテ、越中守ノ駕ニ召サレ道具人數其儘召具シ大炊頭非始メ御側ノ者五六人御供シテ還御アルベシト評議一決シ、密ニ公ヲ召テ御内命アリシカバ公而自身ニ餘リ難有旨御請アリ、將軍家ハ夜中還御アリ、公ハ代リテ止宿シ玉ヒ事故ナク歸府セラレシカバ、直チニ其乘輿ヲ賜ハリシトゾ、諸説同異一ナラズト雖、大抵此ノ如シ、或ハ寛永年中大猷公御社參ノ時トナセ共本多ノ事ヲ以テ考フレバ、元和八年ノ説是ニ近シ、又日光ヘ赴カセ玉フ路次ノ事ニテ内命ヲ蒙リ玉ヒシハ古河城ニテノ事トモアレド、宇都宮城下ニ越中ノ駕籠反シト云フ所アリト云ヘバ、宇都宮ニテノ事ナルベシ、但日光ヘ赴カセ玉フ時ノ事ニヤ

宋ノ祥ナラズ、又一説ニハ寛永三年御上洛ノ時、還御ヲ水口迄送リ玉ヒシ時、御駕ヲ賜フト見ヘタリ、又同年御上洛供奉ノ節、網代金紋先袂箱、長刀、爪折傘、茶辨當免許、以後平常ハ革履ヲ掛ケ、爪折傘、茶辨當持セラル、由見ヘタリ。

江戸御屋敷初メハ山ノ手ニ在リシガ、後八町堀ニテ御拜領ナリ、元福生氏ノ邸ナリ御登城ノ爲ニ御門前ニ橋ヲ懸サセ車ノ通行ヲ禁ゼラル八王寺御屋敷ハ、始メ土橋助左衛門ノ屋敷ナリシヲ御通行ノ時立チ寄ラセラレ、御所望アリ、土橋ヲ召シ抱ヘラル、御屋敷ハ北條ノ時ノ城跡ニテ、要地ナリ、京都ノ御屋敷ハ二條ノ御城近キ神泉苑町ニアリ、是ハ寛永十一年御上洛ノ時賜ハリシ所ナリ、伏見モ御屋敷アリシトゾ。

井伊掃部頭直孝朝臣ト故アリテ、交ヲ通ジ玉ハザル事數年ナリ、然ルニ直孝朝臣或時麾下ノ士某ニ語リテ今天下ニ異變アラシニ、某ガ云ヒ合ハスベキ人ハ、松平越中守一人ノミナリ、然ルニ近年互ニ隔心ニテ疎遠ニ打過グル事心外ナリ、ト申サレシヲ、其人公ノ邸ニ來リ、カクト語リシカバ、公モ喜ビヤガヌ和談セラルベキ思召ナリシニ、慶安四年十二月上旬直孝朝臣ヨリ中根大隅守定成ヲ以テ、故ナクシテ相隔ツ事年アリ、御爲ト云ヒ隣國ト云ヒ後來和睦セン事ヲ思フ、心異ナル事ナクシテ、行テ其約ヲナサント云越サレシカバ、公其志ヲ感ジ慇懃ニ是ヲ謝シ、行テ相見玉フベキ思召ナ

リシカ共、病中御心ニ任セラレズシテ日ヲ移サレシニ、幾程ナクシテ御長逝アリケレバ、直孝朝臣ノ嫡子鞠負佐直滋朝臣來訪アリ、其明春忌終リテ後、光徳公井伊ノ邸ヘ行キ、去冬ノ來訪ヲ謝セラレケレバ、直孝朝臣モ出座アリ禮ヲ厚クシ、公ノ事ヲ惜ミ落涙セラレシトゾ。

公初メ山川、下妻及ビ掛川等ノ城ヲ守リ、更ニ特命ヲ奉ジ、淀ニ新城ヲ築キテ以テ京都ヲ衛リ、己ニシテ大垣ニ移リ、又桑名ニ轉封セラル、凡上方ヨリ關東ヘ出ヅル締メ押ヘトシテハ東海道ノ桑名、東山道ノ大垣ノ兩城殊ニ咽喉ノ地タリ。加之桑名ハ水陸東西ノ押ヘニテ、伊勢一國ノ總括リトナルベキ人ヲ撰ビ、指置カル、事ニテ、關ヶ原役ノ後、本多中務太輔忠勝朝臣譜代ノ元老功臣ヲ以テ首トシテ封ヲ此ニ受ケ、新城ヲ築カレタリシカ、忠勝逝去ノ後定勝公懿親ヲ以テコレニ繼ギ、而カモ大猷公ノ時ニ至リ、定綱公ヲ大垣ヨリ移封シ、十一萬石ヲ以テ桑名ヲ守ラシメ、戶田左門氏鐵朝臣ヲ十萬石トナシテ、大垣城ヲ守ラシメ、桑名大垣兩藩主ヲシテ迭ル迭ル、其封ニ就カシム。之ヲ譜代諸侯參觀交代ノ始トス。御暇拜領ノ節公ト本多殿計リハ御暇被下長ク候ト御請仰上ラレ難有トハ仰上ラレズ外諸侯ニハコレナキコトトゾ又大猷公武家諸法度ヲ定メ玉ヒシ時先ヅ公ヲ召シテ若シ闕クル處アラバ補フベシト仰ラレシニ、公拜見シ、一ヶ條ヲ加ヘ献ゼラレシニ、將軍家大ニ感ジ玉ヒ、即チ其箇條ヲ加ヘラル、此書加ヘ玉フハ何レノ箇條ナルヤ不詳此事御家カクテニハ傳ハラズ信綱朝臣ノ家中ヨリ傳ヘ聞ケト云在府ノ諸侯ヲ、執政松平伊豆守信綱朝臣ノ宅ニ會シコレヲ示サル、時ニ信綱朝臣先ヅ公ト氏鐵朝臣

トニ仰テ宣ベテ曰ク、兩牧先ヅ可否ヲ考ヘテ之ヲ發言セラルベシトナリ、公謹ミテ何ゾ短智ノ及ブ
トコロナランヤトテ拜見ノ人ニ先ダツ事ヲモ辭讓シ玉フ、氏鐵朝臣モ亦深ク之ヲ讓リ玉フ、然レ
共、信綱朝臣類リニ上意ノ重キ事ヲ演ベラル、故ニ公拜戴シテ之ヲ朗讀ヒラル、ニ一旬ノ滞リナ
シ、衆皆之ヲ感ズ、公並氏鐵朝臣言ヲ同ジクシテ教令最感シ奉ルノ旨ヲ申サセラル、是ニ於テ諸侯
各拜見シテ是ヲ書寫シ退出アリ、公並ニ氏鐵朝臣當時幕府ノ有力ナル親信トシテ倚重セラレタル事
知ルベキナリ。

一年江戸御成御臺所ヨリ出火ノ事アリ、公ハ直チニ士卒及火消ノ者都合千餘人ヲ率非、速ニ大手先
キヘ赴キ、井伊掃部頭直孝朝臣、酒井讚岐守忠勝朝臣へ使ヲ以テ一方請取り、火ヲ防グベキ旨、仰
遣ハサレシニ、御天守近シ、梅林阪ノ上御櫓ノ火ヲ拂ハセラレ候ハンヤトアリケレバ、直チニ城内
ニ入り玉フニ、火勢殊ニ盛ナリシヲ懸ヲ楯トナシ、自ラ下知シ、火中ノ多門數十間忽ニヒキ毀テ
テ堀ノ中へ投ダ込マセラレタリシカバ、御櫓悉ナシ、又刎橋御門へ火懸リタルヲモ揉ミ消サセラ
ル、御本丸モ亦恙ナシ、是時糧食ヲ運ビ來リ、井伊酒井兩侯へモ糧食ヲ饋ラセラル、不慮ノ大火騒
動ノ中ニ此心付キ手回ハン行届キシハ、節制ノ宜キ故ナリトテ、各感シ玉フトナリ、大猷公公ノ功
ヲ褒シ直チニ溜池ノ御門警衛ヲ仰セ付ラレシカバ、忝キ旨ヲ謝シ、居館ニ歸ラズシテ直ニ警衛セラ



